

平成 28 年度

第 5 回

地域自立のための「人づくり  
・学校づくり」実践委員会

議事録

平成 29 年 2 月 16 日（木）

## 第5回 地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会 議事録

1 開催日時 平成29年2月16日(木) 午後1時30分から午後3時30分まで

2 開催の場所 県庁別館9階特別第二会議室

3 出席者 委員長 矢野 弘典  
委員 奥島 孝康  
委員 片野 恵介  
委員 加藤 暁子  
委員 加藤 百合子  
委員 白井 千晶  
委員 鈴木 竜真  
委員 竹原 和泉  
委員 埴 博  
委員 宮城 聡  
  
知事 川勝 平太

### 4 議 事

- (1) 第4回静岡県総合教育会議開催結果の報告
- (2) 本年度の実践委員会及び総合教育会議の議論を踏まえた意見交換
- (3) その他

### 【開 会】

事務局： それでは、定刻になりましたので、ただいまから第5回地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会を開催いたします。

本日はお忙しい中、当委員会に御出席いただきまして、誠にありがとうございます。

私は、本日司会を務めさせていただきます文化・観光部総合教育局の鈴木と申します。よろしくお願いたします。

皆様のお手元にお配りしました資料の3枚目に、本委員会の委員の皆様の名簿を添付させていただいております。

本日の出席状況について御報告させていただきます。あらかじめ御欠席の御連絡をいただいている委員は、上から2番目の池上副委員長、中段の清宮委員、その下の後藤委員、中段下の仲道委員、2つ下の藤田委員、下から2つ目の藪田委員、それから一番下の渡邊委員、以上の方々から御欠席の御連絡をいただいております。

なお、片野委員、それから加藤暁子委員につきましては、遅れて御出席ということで御連絡をいただいております。

それでは、開会に当たりまして、知事から御挨拶申し上げます。

川 勝 知 事： 皆様方、どうも御多用中、特に年度末で何かとばたばたと存じますけれども、御出席いただきまして、誠にありがとうございます。

今年度の最後の実践委員会ということでございまして、この実践委員会の目的は、県内外の社会の有識者の方たち、代表の方たちに集まっていたいただきまして、その意見をもって総合教育会議という国が定めた、すなわち首長と教育委員会と一緒に議論をして教育のレベルを上げていこうという制度がありますけれども、その制度に社会総がかり、地域ぐるみであることを保証するための、これがその委員会ということでございます。

これまで4回やっていただきまして、その都度、矢野委員長若しくは池上副委員長に総合教育会議に御臨席を賜りました。そして、ここでの議論を取りまとめていただき、発表いただいて、それに基づいて総合教育会議で議論をしていただくと、こういうことでやってまいりまして、去る12月にも総合教育会議第4回目が開かれました。それはこちらで議論していただきました、いわゆる家庭教育の問題であるとか、いじめの問題であるとか、子供の貧困であるとか、こうした議題について様々な御意見を賜ったのですが、それを取りまとめていただいて、前回は矢野委員長に御出席いただきまして、そして総合教育会議で具体的な、また中・長期の方針なども決定したということでございます。

予算を2月20日から県議会で議論していただくのですが、教育に関しましては、皆様御承知のように、教員はすごく忙しいのです。それで、先生方の御希望で1学級35人以下にして欲しいということで、全国に先駆けまして、小学校1年生から中学校3年生まで、これはもう前倒しで、全国最初にやったわけです。しかし、これは35人以下としていたのですけれども、実は下限を設けていまして、25人を下限にすると。25人を切ると団体競技だとかいろいろなことで支障が起きるということです。ところが、例えば44人しかいないとなりますと、仮に半分ずつにしても22人ですし、35人をつくろうと思うと、35人と残りは9人になってしまうので、そうするとつukれないということで44人のままということがあったわけです。それで、今回下限を取っ払うことにいたしまして、そして来年度、もう既に小学校1年生と2年生は国でやっておりますので、小学校3年生・4年生も25人以下でもよろしいと。これはまた先生を配置しなくてははいけませんので若干お金もかかります。それで再来年には5年・6年、それから3年後には中学校1年生から3年生まで、全体に先生を補って、先生の仕事が楽になるようにするというようなことで、まず平成29年度の予算を20日から審議していただくことになっております。

それからまた、特に子供の貧困で、お父さんもお母さんも働かれていると、なかなか学校から帰ってきても鍵っ子になっているということで、そこで寺子屋というものも必要だということで、学校の学生さん

たちにも放課後に来ていただいて、学習指導、その他のことをしていただくとか。さらにソーシャルカウンセラーとか、学校に必要な、学校の先生方ではないですけれども、アシスタント業務ができる、そういう人たちをしっかりとつけることになりました。

さて、今日は、今年度、最後ということでございますので、これまでの4回の議論を振り返っていただき、ざっくばらんに言い残されたことなど、議論を賜りたいと思っている次第でございます。何とぞよろしく願いをいたします。

事務局： ありがとうございます。

それでは、これから議事に入ります。

これからの議事進行は、矢野委員長をお願いいたします。

矢野委員長： 皆様、こんにちは。お忙しいところをお集まりいただきまして、本当にありがとうございます。

それでは、これから議事に入りますが、今日はまず、先日行われました第4回静岡県総合教育会議の開催結果の御報告をしまして、それについて御質問や御意見などをお伺いしたいと思います。その後で、この1年間の実践委員会、あるいは総合教育会議を振り返って、御自由に発言をしていただきたいと思います。

来年につながる議論を歓迎いたしますが、今年の分についてもっとこういうところに力を入れるべきだったということを含めて御意見を賜りたいと思います。2つ目の議題のほうになるべく時間を使って、第4回の部分についてはその中に含めて御発言をいただきたいと思います。

それでは、第4回の総合教育会議の開催結果について御報告を申し上げます。

12月20日に開かれましたが、私が委員会を代表して出席した次第でございます。

お手元の資料の1ページ、資料1と肩に打ってある資料ですが、これを御覧いただきたいと思います。

4番目の議事にありますとおり、「地域ぐるみ、社会総がかりで取り組む教育力の向上」をテーマに論議がなされました。

このテーマについて、前回の実践委員会で委員の皆様からいただいた意見を実践委員会の意見としてまとめて、資料として総合教育会議に提出いたしました。

お手元の資料の22ページから27ページ、これがその場でお配りした資料であります。

実践委員会の委員の皆様のお意見につきましては、発言者の氏名の記載はありませんでした。中身は、氏名以外のところは全く同じ内容でございます。

資料の1ページに戻っていただきますと、5番に出席者発言要旨がありますので御覧ください。

テーマは2つあって、1つ目が「家庭教育支援」ですが、これにつきましては、4つの意見が出されました。

大学生や定年退職した方を活用して子供の学習支援に取り組んでいる市町がある。具体的には吉田町の名前が上げられておりましたが、このような取組が全県に拡大するとよいという意見がありました。

それから、近頃よく言われておりますワーク・ライフ・バランスを推進するなど、子育てしやすい職場環境を整備していくこと、これが必要であるという意見がありました。

また、家庭教育を支援する取組というのは、いろいろな運営主体がございいますが、これが相互に連携してやっていくのが望ましいという意見がありました。

また、教育委員会の木苗教育長からは、学習が遅れがちな子供の支援に社会全体で取り組むという趣旨で、大学生や教員OBなどの協力を得まして、「しずおか寺子屋」の実施を検討しているという話がありました。

2つ目のテーマの「子供の貧困、いじめへの対応」につきましては、生活困窮世帯の子供を対象とした学習支援は、参加する子供たちが肩身の狭い思いをしないよう配慮して、自己肯定感を育むような支援をすることが重要であるという意見がありました。

また、虐待やいじめを受けている子供たちのサインを大人が見逃さないことが大事であるという意見がありました。

そして、子供と保護者の両方に寄り添う、心と体の寄り所を常時提供していくことが大切であるということをおっしゃられました。

また、教育現場にスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーなどの専門人材をより一層配置することが重要であるという意見がありました。

このほかにもいろいろ意見が出されましたが、主な意見を紹介させていただいた次第です

私は、皆さんの意を体して、この総合教育会議で説明をさせていただいたのですが、教育委員会の皆様に、実践委員会の意見を真正面から受け止めていただいたと。それを前向きに検討して、方向性が示されたと思って大変感謝している次第です。

それは、この1年間を振り返っても同じでございまして、そういう点では、幅広い分野から御出席をいただいておりますこの実践委員会の意見が、県全体の一つのコンセンサスとして教育の中に根ざしていくということを実感した次第であります。

資料の1ページに戻りますが、会議の総括に当たりましては、知事総括と書いてありますけれども、家庭教育を支援する取組を「寺子屋」などの居場所にまとめて、子育てを終えた方や退職された方などの人

材を取り込んで、子供たちの心の寄り所とすること。

また、子供のいじめ、貧困への対応としてカウンセラーやソーシャルワーカーなどの専門人材を学校現場へ導入し、先生方の負担を減らすことが必要であるとの御意見がありました。先ほど冒頭の御挨拶でも触れられたとおりです。

こうした討議の結果、総合教育会議としては、具体化に向けて時間を要するものもあるが、できることから実践していく。これが知事と教育委員会の合意だと考えております。

以上が第4回総合教育会議の報告でございます。

ただいまの内容につきまして、皆様から御質問なり、何か御意見があれば意見をいただきたいと思っております。

今年度は4つのテーマについてやりましたので、たっぷりというほどの時間はありませんが、後で時間をとって反省と今後の展望をやりたいと思っておりますので、その中でお触れいただいても結構です。

子供の居場所づくりということが話題になりまして、子供だけではなく親も一緒に、さらにお年寄りも一緒にというようないろいろな場面を想定した意見が出ておりますけれども、皆様どのようにお考えでしょうか。

この実践委員会でもそういう議論がなされたと思っております。どうすれば自然な形で子供たちが集まって楽しめる、お兄さんやお姉さんと一緒に遊べる、お年寄りの話も聞ける、そういう場所ですね。そういうものがいろいろなところに展開していくといいと思っておりますけれども。

加藤（百）委員： その点では、いろいろなところでそういう場をつくれるのかなというのを感じています。

何度かこの場でも発表させていただきましたけれども、私は、菊川ジュニアビレッジというのをやって8カ月ぐらいたちました。非常に結果が出ていて、引っ込み思案の子を校長先生が選んで送り出してくれて、すごく小さい声だったその子が大きい声を出し、「このハーブティーおいしいですよ」と一般の大人に向けて営業している。一皮むけたなみたいな感じなのです。山口先生という元校長先生にもその子の日誌みたいなものを見てもらったのですが、最初、入りたての頃は自分の名前の文字が汚かったのが、最近の日報の文字はすごくきれいになって、全然違います。

その山口先生がおっしゃったのは、自分に自信が持っていると。実際、全部で2カ月ぐらいしか販売していないのですけれども、60万円ぐらい中学生が売ってしまっていて、1回販売に出ると10万円稼いでくるという、すごく稼げるチームになってしまったのですけれども。そういう意味では、やはり自分が携わったものがお金として社会に評価されて返ってくるという経験を積んで、かなり自信につながっています。

菊川は農業がメインなので、そういう意味では農業で場をつくれまし

た。そこにはシニアの方たち、農家の方たち、空き家を提供して下さる方、企業さんも参画したり、それから東京から講師として、二十五、六歳の、元博報堂みたいなキラキラした女子が指導に来てくれたりとか、いろいろな交流の機会は、そうやって場がありさえすれば、何か一個軸があれば作れるのではないかと思います。

私たちは農業に関してやっているのです、例えば、直売所は少し年齢層が高いと思います。ああいう場所をもう少し若い子が来やすい、少しキラキラした、スムージーとか、ダイエットとか、健康によさそうなものを販売したり、またイートインとかも作っておしゃれな感じにしたりすることで、年齢層の幅広い、コンビニではできない地域の場づくりもできるのではないかと思います。学校に限らず、地域にいろいろな場ができれば、地域らしいコミュニケーションが取れるのではないかと思います。

矢野委員長： どうもありがとうございます。

ほかはいかがでしょうか。

奥島先生は、ボーイスカウトでいろいろと若者の御指導をなさっておられますけれども、何かございますか。

奥島委員： 私がやっているボーイスカウトというのは、御存じのように、これは運動であります。マックス・ウェーバーの言うところの学問と運動との対比の中で考えていただければよろしいかと思います。

運動というのは、高い理想を掲げて、それに向かってみんなをどういうふうにあおり立てていくか、またその中へどう放り込んでいくかということが大事なわけでありまして、そこでやっていることは、事実の探求ではなくて、自分たちが手の届かない理想に向かってどういうふうな全体として進んでいくことができるか。そのための、日頃の訓練を行っていくのがボーイスカウトの運動です。

ですから、ボーイスカウトの運動の場合には、明快でありますけれども、「ちかいとおきて」というものがつくられておりまして、それに向かって、そういうことを考えながら青少年たちが野外活動の中でチームを組んでやっていくということで、簡単に言えば、痛い目に遭いながら自分たちの生き方を学んでいくのがボーイスカウト運動であります。

私がここへ出てきて非常に失敗したと思ったのは、1回目を私は休んでおりまして、最初に言わなければいけないことを言っていなかったものですから、ここでの討議のあり方に戸惑っております。

つまりそれはどういうことかということ、この問題をどういう運動として位置付けているか。おそらくこれは学問体系として、小・中の教育をどういうふうに行っていくかを考えているわけではないのだろうと思っておりまして、そういう意味では、やはり子供たちを育成してい

く、いい市民、グッド・シチズンにつくりかえていくための運動であろうと。

そうすると、運動の理想、目標をどこに置くのかから考えて、私たちは事柄を考えるのですけれども、ここではそういうものがまだ出されていなくて、少しずつ地域、学校をつくっていかうということで、どういう運動にしていくかについての明快な相互の了解、あるいは相互認識が欠けていたために、私は、これについてどう取り組んだらいいかを随分迷っておりました。

私が埼玉県で取り組んだときには、明確に、まず運動の目標は何であるかを考えた上で取り組んでおりましたので、比較的やりやすかったのですけれども、ここではそれがあまり明確ではないためにやりにくい。

例えば、ボーイスカウトの場合でしたら非常にはっきりしておりました、ベター・ワールドというのが究極目的であると言って、そのためにはどうしなければいけないのかということで「ちかいとおきて」があるわけです。その「ちかいとおきて」というのは、ボーイスカウトの場合には宗教が非常に重要な役割を果たしておりますので、要するに神と国に誠を尽くすと、そして仲間を助けますというのが目標であります。そのためにどういうことを考えていけばいいかということでもって、全てをその枠で考えていくことになるわけです。恐らくここでもそんなに違いはないと思っておりますけれども、しかし、そのあたりがどうもはっきりしない。

そのために、私たちがもし考えたとしたら、まずここでやろうとしていることについて最も効果を上げている団体はどこにあるか。そういう団体があるとして、その団体に何が足りないのか。それにプラスしてやっていくためにはどうすればいいのかという形でもって、既存で活躍している団体をしっかり分析した上で、それにどういうものを加えてやっていけば、さらにいい人づくり、学校づくりになっていくのかを考えるというような積み重ねが、議論の仕方を見ておきますと、ここでは非常に難しくなってきました。

そこで戸惑っておって、余り意見が出せていないのですけれども、ボーイスカウトの場合は、今申し上げましたように、明快に運動と位置付けておりますから、理想をまず掲げて、その理想に向かってどうすればいいか、それを自主的に取り組ませて考えさせる。その自主的に取り組ませるといえるのは、要するにデューイのいう小社会ですね、部分社会です。学校という、あるいはボーイスカウトの班という小社会をつくって、その中でお互いにチームワークよくやっていかない限り何事もできないのだということを徹底的に学ばせる。そこから教育ができるという、そういうやり方が非常に明快に、経験的にずいぶん長いこと積み重ねて少しずつ内容がコンプリートなものになってきているわけでありましてけれども、そういうことをここで私がどういうふう



に申し上げたらいいのかということに困っております。

これは私が悪いので、最初から出席できておれば、そのことについてまず議論していただいて、そういう運動としての目標を明快に掲げていただいたのですが。ここでもわからないわけではないのです。大体はわかっているのですけれども、そこへ議論の焦点を持っていくために、私はそれを共通の認識として明確にしていなければいけなかったのではないかと。いろいろおっしゃっていることは、私はみんないちいちもつともだと思えます。いいと思うのです。でも、それをここでの特色ある提言としてどのように知事に答申すればいいのかということが少し見えてこなかったということで、大変申しわけありませんけれども、ボーイスカウトの場合は、今言いましたように、ボーイスカウトという固有のその目的に向かってやっておりますので、そこでの失敗、成功例というのは非常にクリアに検証をしていくことができるという。そういう積み重ねでいろいろやっていくことができるということで、議論がしやすいということなのですから。

私が今ここで何を言っているのか、自分でも何のために言っているのかわかりませんが、しかし、何かもうちょっと積み上げのことができるような議論の仕方を考える必要があるのではないかと感じております。以上です。

矢野委員長： どうもありがとうございました。

私が先生の御指摘に回答する立場にあるのかどうかわかりませんが、この実践委員会を始めたときの皆様の申し合わせと申しますか、考え方ははっきりしておりまして、県が「富国有徳の国づくり」を目指しているわけでありまして、その根幹にあるのが「有徳の人づくり」なのです。徳のある人を子供のときから大人になるまで育てていこうという意味ではありますが、方向ははっきりしているという認識でスタートしたと思えます。

やはり一番大事なのは、いろいろなあるべき論議ですが、教育大綱やいろいろなところに語られておりまして、言ってみれば、そういう論議はもうかなり深くなされてきたと思えます。本当に何が足りないかという、そういう大前提の上に立った具体的な実行が一番大事だと。小さく産んで大きく育てようという考えに基づいて、それぞれ皆さん各界の分野のエキスパートでありますから、その御体験とか、いろいろな見聞を通じて、こういうところから変えていけばいいではないかという提案をまとめて、総合教育会議の場に持ち込もうとしているわけですね。

奥島委員： わかります。それで私が申し上げたのは、大体そのことはわかるけれども、今いろいろな試みがあるわけですね。例えばボーイスカウトも。そういうものの中で有徳の人を育てるために何が足りないのだろうと。

どういう団体がどういう活動をやっている非常に成果を上げている。一方、成果を上げていない団体もある。それはどういうことなのだろうという分析をしっかりしないと、思い付きの議論になってしまうということを申し上げたのです。

矢野委員長： その点は十分反省しなくてはならないと思います。それは常に必要な反省だと思います。

やはり一番説得力があるのは、事例なのです。小さい事例でいいと思います。私は、この会議へ出て皆様のお話を聞いているうちに、それぞれの分野で御紹介いただいた小さい事例が全体につながる強い糸で結ばれていると思います。ですから、先生のおっしゃる反省を常にしつつ、具体例をこの場へ持ち込む。それを皆様のコンセンサスになるようにすることが今まで一番欠けていたと思います。「有徳の人づくり」と言う大変大きい目標で、一口で話し合いにくいかもしれませんが、そういうことを十分踏まえた上で、これからも御提案をいただければと思います。

ほかに何かございますか。

なければ次の議題に進みたいと思います。

前回の総合教育会議のテーマについても、その中でまた触れていただいて結構です。

それでは、配布資料について、事務局から御説明をお願いします。

事務局： それでは、事務局から御説明いたします。

お手元の資料2ページ、資料2を御覧ください。

本年度の実践委員会の意見と総合教育会議における主な意見でございます。

本年度の実践委員会及び総合教育会議では、4つの議題について御協議をいただきました。

まず、高等教育機関の機能強化と知的・人的資源の活用につきましては、実践委員会の委員の皆様から、(1)農業と学術を融合した専門職大学等の創設を検討すべきだ、(2)留学生の奨学金制度、宿舎、就職支援など、留学生の受入れ環境の充実や、(3)ふじのくに地域・大学コンソーシアムの事業や機能の充実を進めるべきであるといった御提案をいただきました。

これらの提案を踏まえ、6月21日の第2回総合教育会議におきまして、知事と教育委員会が協議しましたところ、教育委員会からも大学コンソーシアムの充実、本県ならではの魅力的な学問を学べる環境の整備、農林技術研究所と農林大学校を受け皿とした専門職大学の創設の検討などの御意見をいただきました。

次に、3ページをお開きください。

徳のある人材の育成につきましては、実践委員会の委員の皆様から、

(1)学校での朝読書の時間に音読を取り入れるなど、学校での読書の時間を充実させる、(2)地域に関する教材の作成、電子書籍の活用、ビブリオバトルの充実など、子供たちが様々な本を読むきっかけをつくる取組が必要であるといった御提案をいただきました。

これらの提案を踏まえ、10月13日の第3回総合教育会議におきまして協議したところ、教育委員会から読書活動の推進、あるいは本物の芸術やスポーツに触れる機会の提供といった御意見をいただきました。

次に、4ページを御覧ください。

個々の才能や個性を伸ばす多様な学習機会等の提供につきましては、実践委員会の委員の皆様から、(1)静岡ならではの教材を作成するとともに、学校と地域社会等の連携をより一層充実させるカリキュラムを構築すべきこと、(2)少人数によるきめ細かな学習環境の整備や科学的分野等で非凡な才能を持つ子供たちの能力を伸ばす取組が必要であるといった御提案をいただきました。

これらの提案を踏まえ、第3回総合教育会議において御協議をいただきました。

この第3回総合教育会議には、実践委員会から矢野委員長に御出席いただきましたが、少人数によるきめ細かな学習環境の整備について、矢野委員長から静岡式35人学級の下限撤廃が必要ではないかと具体的な提案をいただきまして、教育委員会からも下限撤廃を含む制度の見直しや検証を行うべきである、あるいはICT教育の充実など、教育環境や教育内容を充実させるべきだなどの御意見をいただいたところでございます。

この配付いたしました資料には、委員長の御提案について記載がございません。この点、補足、訂正をさせていただきます。申し訳ございませんでした。

なお、5ページにございます、地域ぐるみ、社会総がかりで取り組む教育力の向上につきましては、先ほど矢野委員長から御報告をいただきましたので、事務局からの説明を省略させていただきます。

以上のとおり、本年度の総合教育会議で取り上げた4つの議題の協議の結果につきましては、具現化に向けて時間を要するものもございませぬが、教育委員会と知事部局とが事務分担を図りながら、それぞれ責任を持って取り組んでいくこととなりました。

なお、総合教育会議で配付いたしました資料につきましては、6ページから27ページにかけてまして、参考資料として添付してございます。実践委員会からいただきました意見がどのようにまとめられているか、御確認いただきたいと思います。

以上で事務局からの説明を終わります。

矢野委員長： ありがとうございます。

総合教育会議の場では、実践委員会の意見を踏まえた提案を知事から

していただきまして、私、あるいは池上副委員長も背景事情、意図などについて御説明をしております。

今お話がありました4つのテーマについては、これで終わりということではございません。これからずっと先に続いていくわけですから、先ほども少し触れましたけれども、小さく産んで大きく育てる、その中にいろいろな果実が含まれていると思いますので、そういう意味でこれから提案を具体化しなければならないと思っております。

もちろんいろいろな制約がありますので、できるところからスピードを上げて着手していくことになるとと思いますが、これら総合教育会議で合意した事項につきまして、現在の対応状況を事務局から御説明願います。

事務局： 総合教育会議の合意事項への対応状況について御報告いたします。資料の28ページをお開きください。

本年度の4つの議題に、昨年度御協議いただきました4つの議題を加えて、合わせて8つの議題におけるそれぞれの合意事項について、平成29年度の事業の予算案の編成状況をまとめてございます。これから県議会で御審議いただくこととなります。

表のうち、太字・太枠のものが新規事業で、一部を太字で記載しているものが事業内容を拡充した主な事業でございます。新規事業と拡充した事業を中心に事務局から説明をさせていただきます。

28ページ、(1)高等教育機関の機能強化と知的・人的資源の活用につきましては、ふじのくに学術振興事業を拡充いたしまして、新たに高校生の大学授業体験会を実施するなど、ふじのくに地域・大学コンソーシアムの事業を拡充するとともに、執行体制を強化いたします。

次に、県立大学観光人材育成講座開催事業でございます。観光を支える人材を育成するため、静岡県立大学及び静岡文化芸術大学において観光人材育成講座を開催いたします。

次に、農林大学校専門職業大学化検討事業でございます。「ビジネス経営体」を担う人材の育成のため、農林大学校の専門職業大学への移行について検討をいたします。

30ページを御覧ください。

(2)徳のある人材の育成につきましては、幼児教育連携推進事業を拡充し、モデル事業として賀茂地域に幼児教育アドバイザーを配置いたします。

また、「読書県しずおか」づくり総合推進事業につきましては、県高等学校ビブリオバトルの大会内容を拡充いたします。

32ページをお開きください。

(3)個々の才能や個性を伸ばす多様な学習機会等の提供につきましては、知事からお話ございましたとおり、平成29年度から静岡式35人学級編成の下限人数設定を3年間で段階的に撤廃し、県単独措置教員

数を増員してまいります。

次に、次世代の学校指導体制整備事業でございます。教職員の多忙化を解消するために、モデル校に業務アシスタントを配置するなど、学校の指導体制を改善・充実いたします。

次に、学びを拓げるICT活用事業でございます。子供たちの興味や関心を高めるために、授業にプロジェクターやタブレット端末などICT機器を導入し、学力の向上を図ります。

34ページをお開きください。

(4)地域ぐるみ、社会総がかりで取り組む教育力の向上でございます。

まず、「しずおか寺子屋」創出事業でございます。大学生等の地域人材を活用し、子供たちが家庭学習の習慣を身に付けられるよう学習支援の場を創出いたします。

次に、ひとり親家庭放課後児童クラブ利用支援事業費助成でございます。ひとり親家庭への支援として、児童扶養手当を受給するひとり親家庭の子供さんが放課後児童クラブを利用する際に、当該利用料を軽減する市と町に助成をいたします。

次に、社会的養護自立支援事業でございます。18歳となり、施設入所等の措置が終了した後も引き続き支援を必要とする方に対しまして、22歳の年度末まで生活支援を実施することで、より安定した自立を図ろうとするものでございます。

次に、私立学校ネットパトロールでございます。インターネットを通じて行われるいじめ等の問題に対応するため、公立学校に加え、新たに私立学校についてもスクールネットパトロールを実施いたします。

38ページを御覧ください。

ここからは昨年度の議題となりますが、(1)教職員及び高校生の国際化でございます。

高校生の海外への教育旅行を推進するため、高校生国際教育旅行推進事業により旅行先の現地調査、新規実施校の支援等を行います。

次に、私立学校外国語教育支援事業費助成でございます。私立学校の国際化の推進とグローバル人材の育成を図るため、ジェット・プログラムを活用しまして、ALT（外国語指導助手）を配置する私立学校に対して、当該配置に係る経費を助成するものでございます。

また、外国人の子ども教育支援基金は、外国人の子どもの日本語教育等を支援するため、県国際交流協会が設置する基金に県が拠出するものでございます。

なお、資料の表の左側に丸がついている事業は、昨年度の総合教育会議の合意を受け、本年度から取組を始めた事業でございます。この事業につきましては、44ページ以降に本年度の実績をまとめてございます。このうち52ページの地域スポーツクラブ推進事業につきましては、担当課から御説明をいたします。

教育委員会： 健康体育課の福永と申します。

昨年御提案をいただきました地域スポーツクラブに関しまして、本年度、磐田市でモデル事業として、磐田スポーツ部活という形で取り組んでおります。

現在も磐田で一生懸命頑張っていて取り組んでおりますので、主任指導主事の清水から、概要につきまして御説明をさせていただきたいと思っております。よろしく願いいたします。

教育委員会： 先日は寒い中、磐田スポーツ部活の視察にお越しくございまして、ありがとうございました。特に矢野委員長には熱い激励の言葉をいただきまして、コーチも選手も本当に喜んでいました。ありがとうございます。

事業目的です。

3つあります。子供たちのため、教職員のため、地域のために行います。

事業の体制です。

県から磐田市が委託を受け、磐田市が市の教育委員会、学校と常に情報交換を行い、磐田市の財産でもありますヤマハ発動機、静岡産業大学、磐田市体育協会と連携・協力することでこの事業が実現しました。

磐田市における事務局の体制です。

市の担当職員3名と磐田市に駐在している指導主事、私でございしますが、の計4名の体制です。4人で担当業務を分担しております。ちなみに市の職員の主査は、市のスポーツ戦略の中心人物であり、磐田スポーツ部活と市のスポーツ文化を連携させております。

私はもともと体育教師でございまして、中学校の体育連盟の総務を経験しておりました。また、昨年まで市内の小学校の教頭をしておりました。

事業内容です。

3つの柱があります。部活、スポーツ塾、体験教室です。部活は、学校に希望する部活がない生徒のためのものです。スポーツ塾は、競技レベルに合わせて専門的な指導を受けることができる練習会です。体験教室は、学校では経験できないスポーツ体験教室です。

3つの柱の概要です。

部活については、陸上部とラグビー部を創設しました。スポーツ塾については、卓球と陸上を行いました。体験教室については、トランポリンと女子サッカーを実施しました。

陸上部を説明いたします。

指導者は、競技経験者で指導歴のある者です。静岡産業大学の陸上部の部員24名も補助に入っております。市内で学校に陸上部のない3校から募集しました。本年度は東海大会まで出場した選手がいます。来年は熊本で全国大会がありますが、それに向けて今練習に励んでおります。

活動の様子です。

市の陸上競技場です。青いレーンで真ん中に芝生があるという最高の会場で行っております。

続いてラグビーの活動です。

指導は、元トップリーグの選手と市の臨時職員の4名で行っております。市内10校中6校が参加しております。ヤマハのラグビースクールと合同練習で行っております。

昨年までのスクールは、水曜日と土曜日の2回練習でしたが、磐田のスポーツ部活と合同になったことで、月・金が増えて週4回になりました。その結果、全国につながる関西地区予選大会で初勝利をおさめました。

ラグビー部の練習の様子です。

芝生のピッチだったり、人工芝だったりしております。冬季も照明を使用しておりますので、これもまた最高の練習環境ではないかと思えます。

5月13日に磐田スポーツ部活の開始式が行われましたが、それまでに行った事務局の動きです。

学校関係諸機関への説明、会場や用具の準備、保険の加入等を行いました。

部活における配慮事項、工夫などです。

ここに記入した以外としては、私たち4人のチームのうち、必ず誰かが部活に帯同して、コーチや選手、保護者からの相談に乗っております。

スポーツ塾の卓球です。

毎回国内のトップ選手をコーチに招いています。地元の磐田信用金庫・NTNの卓球部の方々にも指導の協力を得て実施しております。当日中学校の顧問が参加していない学校の生徒でも参加でき、教職員の負担も軽減しております。

会場の様子です。

各テーブル4名程度の選手に絞り、技術の向上を図っております。

スポーツ塾の陸上です。

セレスポという企業の陸上部に、磐田市出身でアジア大会6位になった中村選手が所属している関係で実施しました。

会場の様子です。

当日雨が心配されましたので、市の総合体育館で実施しました。陸上部の顧問の参加も多く、熱心に見学しておりました。

体験教室です。

静岡産業大学の協力で夏休みに実施しました。会場にも恵まれ、施設にも恵まれ、指導者、大学生の素晴らしい模範もありまして、子供たちはできた喜びに満ちあふれておりました。ちなみに中央の赤い服を着た方がリオオリンピックのコーチである中田コーチです。

余りにも多くの視察や問い合わせがあったために、中間報告会を行いました。県内外から50名ほどの参加がありました。磐田市役所で開催された様子です。

本年度始めた磐田スポーツ部活の継続は、当然です。一番の課題は、県のモデルが3年で終了しても、磐田市が単独で磐田スポーツ部活を継続できる仕組みや体制づくりを今後行っていくことです。来年度も子供たちの夢の実現と笑顔が生まれる活動になるように尽力していきたいと思っております。ありがとうございました。

矢野委員長： どうもありがとうございました。

私も見学に行きまして、中学生の子が懸命に身体を動かしているのを見て、本当に素晴らしいと思いました。ラグビー部を見に行ったのですが、指導者がヤマハで選手として前の年まで活躍していた人ですから、超一流の指導者を得て、子供たちの目が輝いています。本当に素晴らしい試みが始まったと思います。是非これを成功させていただいて、もっと県内に、また他県にも拡げていきたいと思えます。他県からもたくさん問い合わせがあるようですが、何よりも、皆さんが取り組んでおられることの素晴らしさを証明していただくように、これからもよろしく願いいたします。

皆様からこの実践委員会でいただきました意見が、いろいろな形で実を結びつつあります。スポーツであったり、あるいは学校教育の教師の問題であったりしますが、私はみんなつながっていると思えます。1年限りのプロジェクトではなくて、ずっと続くわけですから、毎年このようにして積み重ねていったものが形を成して、最終目標につながるのだと思えます。

それでは、今年1年間を振り返りまして、皆様の御意見を賜りたいと思えます。今後、こういうテーマについても論議したほうがいいのではないかというものがあれば、それも含めて御発言いただきたいと思えます。

奥島委員： 今お話をお聞きしたところは、全部私も賛成です。しかし、今のいろいろな試みをどう位置付けるかということだけは、しっかりしておかなければいけないと思えます。というのは、私、先ほどデューイの名前を出しましたが、御存じのようにデューイという教育学者は、それまでは統一的であった暗記と試験を中心とした学校制度を、もっと生徒たちの自主性を生かした、そういう活動にしていかなければいけないと言って、それが戦後のひと頃、日本の教育界につながってきたのですけれども、それについて見識のある検討がしっかりなされなかったもので、すぐに崩れてしまって、現在、また受動的なやり方になっている。そこで、それだけではだめだということで、今のよういろいろな試みがなされる。誠に結構なことだと思えます。



しかし、私はやはり、学校という一つの部分社会においても、自主性をどういう形で理解しなければいけないのか、そういうフィロソフィーをどこかで確立しておかないと、部分的に「ここは、ここは」という形では、今後の問題が残ると思います。

例えば、私は農村文明の塾をつかっていて、その塾長をやっております。川勝知事が中心になり、非常に強力で押し進められてきておまして、今度、日本中の首長たちが集まって、新たに農村文明創生日本塾がつくられました。私はたいしたことはできませんけれども、一応塾長になっております。私は随分いろいろなところで農業高校を視察したり、お話を聞いたりしました。そこで非常に思ったことは、今、こんな言い方はここだけのことととどめて欲しいと思いますけれども、要するに農業高校というのは、普通科に行けない者の集まりなのです。ですから、本当に農業をやりたいと思っている生徒たちがどれぐらいいるかといったら、わずかなものです。しかし、その連中を伸ばすようなシステムをここで考えなかったら、何のために農業高校をつくったのか、それよりも何よりも日本の農業の未来はどうなるのかということをお私は大変危惧しております。「そういうものをつくりましょうよ。せめて長野県だけでも農業高校はここ1校ということで、本当に農業をやりたいという生徒たちを集めた学校にしましょうよ。」と、随分いろいろなところと協議をしましたがけれども、結局は先生も配置されているし、そして普通科に行けなかった者の受け皿も必要だということで、本来の農業高校のあり方がくしゃくしゃにされている。日本中がそうであります。そういうことを、考えていかなければいけない。

いろいろな専門を生かせるような高校もつくっていかなければいけませんし、また、専門を生かせるような高校だけではなくて、普通科においても、例えばイギリスのパブリックスクールのような形でもってスポーツを非常に重視して、心身ともに健全な青少年をつくっていく。これが行く行くは社会を支える本当の力になるという、そういう考え方を教育の中に入れていくといったフィロソフィーをどこかで強烈に打ち出さなければいけない。

そういうことができるのは、何といっても教祖的風格のある川勝知事にやってもらいたいとお私は思っておりますけれども。冗談で言っているわけではありません。私は真面目に言っているのです。誰かがそういうことを言っていかなければいけない。そうでないと、個別的な試みがいろいろ出てきても、それがフィロソフィーとして教育のあり方、あるいは青少年の育成のあり方とびたつとつながらない。ここでこういうことがある、ここでは成功した、そこは要するにお金を入れた、それから優秀な指導者たちが集まったので成功したという事例では、これは全体に広まっていきません。私は今の日本の教育には、そういうフィロソフィーが欠けているところに一つ問題があるのと、それか

ら、そういうフィロソフィーで進んでいったら、何もスポーツだけではない。芸術活動一般だって必要であると。これはもう川勝知事が日頃強調されておりますから、そういうことは当然でありますけれども、いろいろなところで波及効果というよりも、日本が文化国家として、あるいは日本が芸術活動のプラットホームとしての存在感を得るような国になっていくだろうと。そういう運動をつくるのだというつもりで、私はいろいろな問題に取り組んでいるのですけれども、そういう運動になるためのフィロソフィーが必要だと思っております。そういう意味で、今の試みは、私はみんな賛成しております。どれ一つとしていい加減にしていいと思っております。しかし、それを大きな運動として打っていく、あるいは進めていくための、そういう全体をまとめるようなフィロソフィーを是非とも最初に考えて欲しいと感じております。

矢野委員長： 大変貴重な御意見をありがとうございました。

富国有徳のくにづくり、そして教育という面に焦点を合わせれば、文・武・芸の三道鼎立ということが、静岡のモデルと言っていい。ある見識を持った方向性だと思います。今、先生のお話を聞いていて、原則的なところをいつもチェックしながら個別の問題を考えていくことが大事であると思いました。

農業の話が出ましたが、片野さんはいかがですか。

片野委員： 先ほど農業高校のお話を奥島委員からいただきましたけれども、私のイメージなのですが、今の農業高校はレベルが少し上がっていて、女の子が多いイメージです。何か文字を見ると、昔は、畜産科、園芸科、食品衛生科みたいな漢字で書くようなものでしたが、今はアニマルセラピーとか、少し柔らかなイメージで包んでやっているというところで人気が出て、農家のせがれは普通では入れないという状況がままありまして、私自身も、もしかしたら今は入れないのではないかと思うぐらいレベルが上がっているという気がしています。卒業して、そのまま農業や、それを支えるような産業に入っていればいいのですけれども、志なしに「ここに入りたいな」と単純に思って入って、最終的には、第3次産業に入ってしまう子たちが多いと思います。

そういう中で、真剣に農業をやりたいと思う子供たちをどうやって教育していくかというところで、以前、私が言ったことが、高専があるならば農専があってもいいのではないかと。もっとアカデミックに、もっと特化してやってもいいのではないかと。しかしながら、お金もかかる話なので、なかなか農専化は難しいかもしれませんが、今日の資料の28ページ、農林大学校専門職業大学化検討事業、私は今日初めてここで目にしたのですけれども、静岡県には農林大学校というものがありまして、準大学になるのでしょうか、これが本当に専門職大学に

なっていくことで、より専門的なものを扱うのであれば、これはものすごく農家にとってメリットがある話です。

今、農家は、昔のように3ちゃん、お母ちゃん、おじいちゃん、おばあちゃんで行っている農業から脱却して、だんだん従業員を雇うようになってきました。私の世代や20代でも、少し下の人を雇って、その人の生活を守りながら、その人に経営を支えてもらっています。そういうところでもう勉強して卒業していただいて、農業の第一線で働いてもらえるような即戦力になる人が、僕自身も必要だと思っています。自分は酪農をやっていますが、自分がいなくても牧場を回せるぐらいのリーダー的な、右腕になるような人材が欲しいです。

高校を卒業して、採用後に勉強してもらおうというケースもありますけれども、このようにもっと専門的なことを目指してやっていくことを進めていただければ、いろいろ免許も取れますし、例えばトラクターであったり、もっと専門的に言うと、牛の種つけ、人工授精にも免許があります。そういったものも、今の農林大学校ではちゃんと教えてくれています。それよりもさらに後押しをしてくれることは、私たち第1次産業の立場としてはすごくウエルカムな話です。

そういうことで、これから先、農林大学校、専門職業大学というものを手始めにして、農業がより専門性を高めていく、人材がどんどん磨かれて、その人たちが第1次産業の第一線にどんどん参入してくれるように、その席の数をどんどん増やしていただきたいと思います。

次に農業とは話がずれてしまうのですが、これまでの総括として、私自身昨日まで考えていたことがありまして、今までの話の中で一番の主な柱は、地域の大人たちが子供たちに何かを教えるということを中心に話をしてきましたけれども、子供が子供を教えるような、それこそ部活などはいいですよね。先輩が後輩に技術を教えていくということによって、先輩である子供が自分自身も再確認をしますし、技術の向上につながる場所もあるのですが、果たして根幹の教育の中、授業の中などでそういうことができるのかどうかなのです。昔、小学校・中学校は9年制がいいのではないかという話をさせていただいたことがあったのですが、それは高学年の子供が低学年の子供に何か教えるような、例えば落花生でも最初に高学年の子供たちに教えて、また次の週に、高学年の子供たちに落花生のまき方を1年生に教えてくださいねというような形でやらせると、よりよく学習してくれるのかなと期待をしています。

また、読書感想文なども、父兄参観でやっているようなイメージがあるのですが、それも、もしかしたら1個下の学年の子供たちの前で発表したりすることによって、例えば6年生ならば5年生の子供が興味を引くような、そういう読書感想文を作ってきてくださいねと言うだけでも、何か少し違うことが起こるような、もっと何か伝えるためにはどうしたらいいのかということで本をしっかり読んでくれる

のかなと思います。子供が子供に教えるような環境づくりというのも今後の課題としてあるのではないかと考えております。以上です。

矢野委員長： ありがとうございます。

今のお話は実業教育ですね。農業だけではなくて、工業、商業をどうやって充実させていくかというのは大きなテーマです。どうもありがとうございました。

それでは、加藤さん、お願いします。

加藤（暁）委員： 9月からの会に出られず、本当に申し訳ございませんでした。海外へ出張していました。

今のお話を受ける形で発言させていただきます。

私は、全国から高校生を集めまして、福岡でサマースクールを2週間開催する次世代リーダー養成塾というのをやっています。ここには静岡県を含めて、いわゆる進学校だけではなくて、農業高校の子も結構来ているのです。ここで、農業高校の子たちが、すごくいい働きをしてくださるのです。

というのは、やはり何かやりたいという目標がある。それから、自分たちで何かを作っているという自信がみなぎってしまっていて、そこは進学校の子たちとは全然違います。むしろ進学校の子たちは、自分ではできると思っていたのが、何かディスカッションしているうちに弱いところが出てきたりすると折れてしまうところがあるのですけれども、農業高校の子はしっかりしてしまっていて、例えばある進学校から来た子が、「俺が一番頭がいいのだから俺に従え」みたいなことを言って、それで女子生徒を泣かせてしまったことがあったのですけれども、そうしたら、そこに農業高校から来た子がいて、その子が、「俺は昨日まで乳牛の花子の乳を搾っていた。」と。それで、「花子に明日からリーダー塾に行くから早く乳を出せと言っても、花子はその気にならなかつたら乳は出ない。そんなに人間思うようにはならないのだ。」と言って、進学校の子をたしなめて、一番説得力がありました。

それは一つの例ですが、やはり実践をやっているという強みがすごくありまして、先ほど女の子が多いという話もありましたが、今、静岡では、例えば花を作る分野なども女性が多いと聞きましたし、それから料理に直結できる安全・安心な生産物を届けるという意味で人気が出てきていますから、やはり女の子が多くなるということは、ファッションナブルだということだと思います。そこは、もっと伸ばしていただきたいと思います。

それから、掛川にキウイフルーツカントリーというキウイでは日本一の農家がありまして、この前、私がそこへタイの政界の方たちを連れていったのですけれども、最近、外国人の視察団がすごく多くて、1週間に3回ぐらい来るといいます。そのみならず、袋井のメロ

ンや道の駅などに訪れるそうです。アジアの人たちが何を今学びたいかという、安心・安全なものを作って、それを流通に乗せる。つまり、道の駅で自分たちが販売するということなのです。例えば、私が聞いたのは茨城のほうだったと思いますけれども、道の駅みたいなものがタイのバンコクに進出して、今すごい人気になっているのです。生産物が来る前に、予約販売で売り切れるような状況になっていまして、その意味で、今回、農林大学校専門職業大学化検討事業というのがありますが、これはある意味、日本の農家の御子弟のみならず、やはりアジアの人たちも受け入れて、一緒に何かをやっていくことが大事だと思いますし、静岡は品種も全国一多い県ですので、そういうところをうまく組み合わせて、これをどうやって売るか、ビジネス化するかというところは先駆県ではないかと思いますが、それをもっとPRして、若い人たちも取り入れて何かやっていくこともいいと思います。

矢野委員長： ありがとうございます。  
それでは順番で、加藤さん、お願いします。

加藤（百）委員： 私が、今やりたいと思っている企画は、農業ロボットコンテストというか、アグリテックのコンテストなのです。

1年ちょっと前ぐらいになるのでしょうか、国際ロボット展という世界一大きいロボット展で農業ロボットコンテストをやったときに、高校が3校、大学は工学部が3校、全部で6校出ました。前にも話をしたかもしれませんが、彼らが言ったのです。「自分たちが勉強してきたことが社会に役立つのだということが、農業ロボットをやることでわかりました」と。高専はロボコンがあるのですけれども、あれも偏った技術で社会にいつ役立つかわからないと問題になっています。ニッチなことをやり始めてしまっているの、反省していると聞いています。

なので、やはり社会実装というところを意識した工業系と、それから農業はもうお二人がおっしゃったように、社会にかなり密接に関わった産業ですので、そういう意味では、農業と工業が連携して物づくりをしていったり、何かしらの目標に向かってコンテストをやったりすると、地域がもう少しまとまるというか、静岡県の地域は物づくりが得意ですけれども、そして、農業は特に浜松などが非常に盛んなのですけれども、そこが全然つながっていない状態ですので、そういう意味で、コンテストを行うことで県内外からいろいろな農工連携のチームが集まって、一つのアグリテックの聖地になるのではないかと思います。

こうしている間に、MITやスタンフォードなどは、農業ネタで世界中でPRをしていまして、日本が先だったのに、すっかりメディアを

使って、あちらが先のようなPRをして、研究が進んでいるのに少し焦りを覚えています。アメリカでは、何かしらのコンテスト効果をわかかっていて、DARPA（ダーパ）の自動走行もありますけれども、下で支えるのももちろんなのですけれども、コンテスト効果をうまく教育の中にも取り入れて、スターをつくるというのもわくわく感を創出するためには大事だと思うのです。トップの子たちが来る、ここに来れば世界と交わった開発ができるのだと、そういうイメージ付けのためのコンテストを、教育プログラムの中で静岡版として今後検討していただけたら嬉しいと思います。

矢野委員長： ありがとうございます。  
それでは、白井さん、お願いします。

白井委員： お話を続けていきたいと思います。  
今のお話は、ほかのところにもとても活用できると思いました。話題になっていた高大連携です。高校生と一緒に大学生がコンテストをしていくとか、お話を伺っていて、菊川ジュニアビレッジが成功したのは、やはりプロセス性があり、1年間とか2年間取り組むとか、目標を持つことで子供たちのやる気を引き出していくと思いますので、コンテストに高大連携で一緒に取り組むなど、具体的なビジョンを持って一緒に取り組んでいくというチャンネルがあったらとてもいいのではないかと思います。

それから、農業ということ言うと、静岡大学もアジアブリッジプログラムというアジアの留学生を積極的に受け入れるプログラムを行っていますが、是非農業の専門職大学でもアジアとの交流、特に農業の経営ですとか、ビジネスなどのほうでも裾野が広がったらいいと期待しています。

次に、少しコンソーシアムのことをお話したいと思います。

1年間参加させていただいて、この会議の特色として、社会全体でどういうふうに教育に取り組むのかという横串を差すような議論はとても盛んにあって、スポーツ、芸術、企業、NPO、地域、市民が総がかりで教育に取り組むという議論は十分にできたかと思うのですが、気になるのは縦のつながりです。小・中・高・大と、あるいは幼児教育ということも含めて、縦の関係をどうしていくのかということがもう少し議論ができたらと思いました。

例えば高等教育、特に大学という資源を高校、中学校でどういうふうに活用していただくかということ、また、中学生、高校生が、例えば生活困窮などがあっても大学進学を目指せるという意味で、下から上に引き上げていくようなチャンネルと両方、これから横軸とともに縦軸も考えられればと思います。

大学という場に今感じているのは、コンソーシアムをもうちょっと

やんと活用させたいということです。例えば人材活用という意味でも、たくさんの現場がボランティアを求めている、私が関わっているような分野ですと、少年院だったりとか、家庭裁判所ですとか、児童養護施設だったり、一時保護所だったり、あるいはひとり親家庭だったり、たくさんのところで大学生ボランティアを求めているのですが、その情報が入ってこないです。個々の団体が個々の口コミで人材を募集しているような状況なので、是非コンソーシアムなどの仕組みを活用して、大学を積極的に巻き込んでいくようなチャンネルができたらいいいと思います。以上です。

矢野委員長： ありがとうございます。

今の話の中にあつた幼児教育の問題は、実はこの実践委員会では、ほとんど出ていないので、これからの課題として考える必要があるかもしれません。やはり家庭教育が一番の大もとなのでしょうから。大変いい御意見をありがとうございました。

コンソーシアムには、県も大分力を入れていまして、各大学とも連携姿勢になっているように思いますので、どうぞよろしく願いいたします。

次に、宮城さん、お願いします。

宮城委員： 少し長い話になってしまうかと思いますが、お許してください。

先ほど矢野委員長と奥島先生が話しているのを聞いて、つまりフィロソフィー、全くそのとおりだと思いました。矢野委員長もおっしゃったとおり、一言で言えば、それは徳というゴールがあるのだと。まさにこれがフィロソフィーだと思ったのですが、僕みたいな仕事をしている人間が徳ということについて何か言える器ではないかもしれませんけれども、思ったことをちょっと申し上げます。

例えば、非常に様々なところで危機に瀕している今の世界の中で、徳があるという人は、実際どういう行動をするのだろうかとか具体的に考えてみると、何か扇動されたり、あおられたり、場合によっては恐怖で脅されたりして、人々がある種の熱狂とか、いわゆる没入というのでしょうか、周りと同じだと安心するとか、没入とか熱狂の中で冷静さを失っているときに、少し余裕を持って物事を見て、世界を見て、「何のかんの言っても、あなたはそれなりに幸せじゃないですか。」「結構世界のほかの人たちと比べれば、割合豊かなほうじゃないですか。」とか、そういう余裕のあることが言える。「御自身をよく見てみれば、そんなにブーブー言うほど、あおられるほど不満のある人生じゃないんじゃないですか。」なんていうことが言えるような方、そういう人が、今の時代、徳のある人なのかなと思いました。

この余裕とか、ある種の冷めた目というのでしょうか。つまり、熱狂とか没入の対角にある、ある種の冷めた目、こういうものと美を求め

る心というのは、どう関係があるのだろうか少し考えてみたのですけれども、僕は、グランシップの静岡芸術劇場や舞台芸術公園に毎日、稽古、あるいは仕事に行っているわけですが、今の季節には、ほとんど毎日富士山が見えます。富士山というのは、本当に見飽きないのですね。毎日毎日、本当に見飽きない。どうしてなのかと思います。僕は、引っ越してきて10年たちます。10年間見続けてきて、なぜ飽きないのかというと、それは一言で言って、毎回違うからなのです。つまり、富士山というものは、こういうものだという自分の中の刷り込みというか、既成観念を毎回刷新してくれるのです。「あれ、こんなだったか。」と。「こんなに恐ろしい表情を持っているのか。」とか、「こんなにやわらかいのか。」とか、僕らの世代だとお風呂屋さんに描いてありましたから、既成観念が非常に強いものなのですが、実際の富士山は、既成観念、既視感みたいなものを毎回毎回洗い流してくれるのですね。

本当の美というのは、こういうふうに入心の中に、ある種の既成概念といますか、先入観といますか、そういうものを洗い流す力があるのではないかと思います。つまり、二流の芸術というのは、その時代その時代の支配的な美意識に乗っかっているだけ。人々が刷り込まれている、「これなら格好いい」、「こういうのが美しい」という美意識に乗っかっているだけ。これが二流の芸術で、大抵そういう芸術は、その時代は人気が出るのですけれども、100年ぐらいたつと大体忘れ去られます。モーツァルトの時代にもベートーベンの時代にもそういう人がいましたけれども、もう演奏されなくなっている。

やはり真に美しいものというのは、その時代の支配的な美意識を相対化できている。例えばダリの絵などを見ると、誰が見てもきれいねというようなその時代の普通の絵葉書画家みたいな人の絵をわざわざ模写してあって、しかし、そこに少しだけ違う要素が入っていることをやっている。つまり、絵葉書画的な美意識を相対化できているのですね。

この相対化する力が、美を求める力の本質にあるのかなと。そう考えてみると、一流の芸術というのは、常に人に対してある種の冷めた目、あるいは先入観を洗い流すことを教えているのかもしれない。だから、時代を超えて生き延びていくわけです。あるいは地域を超えて広まっていく。こういうふう考えたときに、やっぱり今、美を求める心、あるいは美というもののそのものが、徳というものに何らか結びついていくのだろうかと思いました。

それでは、美を求める心、あるいは美というものの本質がどうやって獲得できるのかを考えると、それはやはり、「うわあきれいだな、こんなにきれいだったのか、富士山は」と思う、その美を見る経験なのです。その経験がないと、美というものの本当の力に気づきようがない



いですね。こう言うのはなんですかけれども、この世の中、例えばテレビに流れているものだけを見ていけば、恐らくさっき僕が申し上げた二流の、つまり世の中で格好いとされているもの、世の中で美しいとされているものに乗かったものしか流れてこないのではないかと。その中で、なかなか真の美というものに出会うチャンスは、若い人にも早々用意されているわけではありません。

昔は自然と触れ合うことで、真の美に目覚めることができたと思うのですけれども、自然の美とさえ今日は切り離されてしまった。何がしか一流のものと出会う機会をわざわざつくらないことには、なかなか真の美と出会ってもらえないのかなと考えました。

もう一つは、先ほどのお話で居場所ということと、一方でスターをつくるというか、突出したスターが出てくるということは、一見離れているようなのですが、結構近いのです。つまり、スターになるような子というのは、とにかく周りになかなか合わせられない子が多いと思うのです。僕の知っている限りでも、本当に世界で活躍しているアーティストで、例えば静岡出身の人もいます。そういう人と話をしてみると、「中高時代は浮きまくっていたよ」と、本当に異口同音に言っています。「もういる場所がないと思ったから東京へ行ったのだ」と、本当に異口同音にそういうことをおっしゃるのです。

その浮きまくっていたというのは、どういうことかと考えてみると、やはり子供たちは大体同世代の仲間としか社会をつくれないうです。同世代の仲間がつくる社会の中で、どう言ったらいいでしょうか、集団行動をうまくやることを求められている。「集団行動がうまくないと、リーダーにもなれないよ」と言われてしまう。しかし、その周囲にいる集団の構成員というのは、先ほど申し上げた先入観に余り疑いを持っていない人たちであり、その当時の支配的な価値観に疑いを持っていない人たちが周囲にいると感じると、何か「もう僕は浮いているな、私は浮いているな」と思ってしまう。そういう人は、なかなか中・高の学校生活でリーダーシップをとれないのです。むしろ変わり者と言われている。でも、こういう人たちこそが30歳ぐらいになると、世界のトップに躍り出てくるような場合があるわけです。こういう人たちを地域がどうやって大事にするかということを考えていくと、さっき話に出ていた居場所づくりと結構近いと思うのです。つまり、本当に狭い自分の学校の付き合いだけではない何か別のもの、一芸だけ教えるような教室が地域にあって、それは絵でもいいし、サイエンスでも、農業でも、もちろんスポーツでもいいのです。その道の一流の指導者がいて、何か一芸だけを教えるようなサークルが地域にあって、そういうところに学校という枠を超えて参加できるようになっていけば、そこで意外なことに彼らがリーダーシップを学んでいくかもしれない、集団行動というのを学んでいくかもしれないと思います。

学校を超えた何かをつくっていくということは、両方の意味で、つま

りスターになるような子が伸び伸びと育つということと、居場所ができるということの一挙両得なのではないかと感じています。

最後に、若い人たちに何か芸術を見てもらう機会をつくることは大事だという話で、我田引水になりますけれども、せっかく静岡県にSPACがごございますので、自分で言うのもなんですが、世界を代表する劇団の一つになっておりますから、とにかく県内の中高生、あるいは県立高校生は全員見られるという制度を何がしかつくっていただけないものかと。今、SPACとして、県内中高に呼びかけていますけれども、どうしても学校行事との兼ね合いで希望する時期が重なって、全員が見ることができないのです。とある時期には、いろいろな学校が希望するけれども、とある時期になると、うちはスケジュールがその辺はとか、あるいは授業をもう休めませんということになって、県内で半分ぐらいの子たちしか、まだ見るチャンスを持ってもらえていない。どんなに頑張っても3分の2ぐらいまでしか行かないのです。それなので、何かそこを全員が見られるようになったらいいなと思っています。

矢野委員長： どうもありがとうございました。

小学校5年生になると、社会科でみんな工場見学をしたりしていますので、芸術分野での見学会というのがあってもいいわけですね。それもまた、これから少し議論しなくてはいけない課題のように思います。前段でおっしゃったことも含めまして、本当にありがとうございました。

それでは、埴さん、お願いします。

埴委員： 今、徳とか機会という話が出ましたけれども、それこそ子供たちにとって一番大事なのは、いろいろな機会を提供してあげることです。先ほどの居場所として、一番わかりやすいのは、やはり学校なのです。学校がどう動くかというのは、非常に重要だと思います。私どもは私学ですので、どちらかというところと自己完結型で何でもできるという、いい面があります。全部、校長のところと責任が来ますけれども、そうは言ってられないですね。それこそ、なりふり構わずいろいろな機会を設定して、子供たちに挑戦をさせております。

そんな中で自分たちも共感し、これをスタート地点にして学びを深化させていく。そして、大学に進学していく。さらに学部なり何なりに発展させていけます。

ところが、現場の先生方には、進路指導というのがあります。この生徒は、模試でどこを志望校に上げているだとか、あるいはこういう適性があるからとかで、大学をぼんと受けようとしています。しかし、大学のことは何も知らないのです。例えば、どこの大学は蔵書をどれだけ抱えているのか、どんなジャンルを集めているのか、資料にはどんな

ものがあるか全く知らない。実験機器をどれだけ揃えているのか、さらに認可・申請ということもありますよね。手続を踏んでいないというケースもあります。あるいは、どれだけ奨学金が確保されているのか、何も知らないまま送り出してしまいます。高大連携と言いますが、それでも、それでは余りにも無責任ではないかと。もう一つ連携を図るためには、現場の教員に大学をきっちり理解させる必要があると、そんなことをよく言っております。教員は子供たちに、「これから大学で学ぶのでしょうか」と言っておりますが、教員がどんな大学か知らないです。

それから、いろいろなことに取組をとということで、学校にとって一番手っ取り早いのは、やはりスポーツなのです。一番の問題になるところもそこなのです。そこが変われば、学校は簡単に変わります。いろいろな取組をさせるということで、特にスポーツをやっている連中には奉仕活動を徹底してやらせています。サッカーの選手権がありましたけれども、本校は全国大会に出て1回戦敗退となりました。彼らの練習時間は1時間15分なのです。あとは奉仕活動をやれと。そんなことで、挨拶とか立ち居振る舞いとか身なり服装とか、授業風景もそんなのですけれども、サッカー部の連中がリーダーシップを取って、学校行事も大分変わってきています。いろいろな方々、あるいは幼稚園から特別支援の子供たちを呼び込んでいろいろ活動していますし、外に出て行くこともしております。

私のところは普通科と英数科という科はあるのですが、進学をベースにしたような学校です。今は地域創生がいろいろと問題になっていますよね。これを何と現在の1年生の一部のクラスで、地域課題解決プログラムというのを導入して、今、みんなが取り組んでくれています。非常に難易度、ハードルは高いのですが、それでも真剣に取り組んでいるのがなかなかいいですね。そういういろいろな活動を通して感じるのは、やはり本当に徳ですよね。私たちも子供たちに徳とは何ぞやから入るのですよ。それこそ、神道、仏教、儒教、それから近代化の流れなどいろいろ話をしますが、なかなか浸透しないのです。子供たちは実践を通して学ぶところが大きいものですから、そういう意味では大きく変わってきたのかなと感じています。

それから、この会議にもよく出てくるのですが、「連携」という言葉ですね。地域の青少年問題協議会とか、あるいは学校警察連絡協議会というのがあります。そこでもよくこの言葉は出るのです。何かありますと、情報の共有化と連携の強化と、当たり前のように出てきます。ところが、情報の共有化というのが図れないのです。資料を見ていただくとコーディネーターなどとありますけれども、情報をいかに共有するのが非常に難しい問題です。

それこそ子供たちの事情であったり、発達障害であったり、素行であったり、様々な情報が、保護者の方から中学の先生方のほうへ情報提

供がないという問題もあります。それから、情報提供があっても、中学から進学先にその情報が全く伝わっていないという状況が毎年毎年なぜか出てくるのです。「何か」と問いただすと、「実は」みたいな話があります。そういういろいろな情報を知った上で共有するのと、そうでないのとでは、結果は大きく変わるのです。もちろん個人情報保護法とか、検討すべきことはいっぱいありますけれども、子供の教育、あるいは成長のためですから、しっかりと情報の共有に取り組むことが必要だと感じております。

それから、先ほど自然という話がありましたけれども、自然に対しての畏怖がなくなってしまって、大人も子供も大分観察力が落ちていきますので、これも少し問題かなと思います。教育現場の中でできることをいろいろやってはいますが、やはり限界を感じる部分もあります。

いずれにしても、大人も子供もともに学ぶという姿勢がないとなかなか難しいです。先生方にもよく言うのですけれども、「生徒が1時間勉強するのだったら、教師は10時間勉強しろ」と。

昨年、こんなことがありました。ラオスに教育視察に行かせたのです。それで、その報告会があったのですが、何を勉強してきたのかと、聞いていて腹が立ちました。事前学習がゼロなのです。ラオスは、他の国に比べて経済成長が遅れているとか、社会的にインフラが整備されていないなど、どこの物差しを持ちこんでいるのか。おかしいですよ。何のための視察だと。視察が多分遊びなのでしょうね。それとか、民族の精神文化を大切に、それを教育の中で徹底していると。そういうことは、現地の人はずっと忘れてしまっていますよ。20年前、30年前、40年前のラオス、ベトナム、カンボジア、タイを知っているのかと。それから、「ボランティアが対人地雷の解体をされていてすごい」と言うのですが、教員をやっていて、対人地雷のことも知らないのかと、そこまでは言いませんでしたけれども。

いずれにしても、視察をしてもらってはいるのですけれども、その前にたくさん課題を出して、報告書をしっかり出させてほしいなと思います。

矢野委員長： ありがとうございます。

では、竹原委員、よろしく申し上げます。

竹原委員： 私は、小・中学校を主に現場としていまして、横浜市の中学校区に深く関わり12年目になります。また、地域とともにある学校を推進するために各地に伺ってお話するとともに、必ず1校か2校訪問させていただき、それぞれの御努力や先進事例を見せていただいております。また、静岡県内の幾つかの教育委員会でもお話をさせていただく中で、学校と地域の連携・協働に対する皆さんの関心の高さを感じています。

その中で、先生方が忙しいこと、社会的な格差が広がっていることが

大きな課題だと感じています。

そして、部活動の問題です。私たちの中学校でも部活動の問題が学校運営協議会で課題になっているのですが、その課題を解決する一つがスポーツ部活という御提案であり、とてもすばらしいと思いました。普通のところではなかなかできなくて、子供たちの希望と保護者の願い、そして学校の現状をどうすり合わせるかがとても大変だということを見てきました。

今後、専門家を入れるということが大事です。先生が最大の専門家ではありますが、そこにスクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラー、部活の指導員の方が加わり、チーム学校を推進していく必要があります。さらに、専門家ではないのだけれども、地域の資源を全て総動員していかないと、多分、これからの教育環境はよくなるのではないかと考えています。企業も、どうしたら自分たちの持っているものを教育現場で活かせるか、相当勉強されています。そして、地域総がかりで関わる時、それをつなぐ人がいなければならない、それがやはりコーディネートの仕事だと思っています。

また、学校運営協議会の役割を考えると、学校の先生方、校長先生たちは日々、マルかバツではない判断をしなければいけない、黒か白ではないことを、苦しみながら判断するのですけれども、学校運営協議会等で様々な人の知恵や意見を取り入れたり、後ろ盾を得られたりすることで、自信を持って判断ができます。

さらに居場所、空間がとても大事です。私は12年間、中学校の中にある380平米の小さな公民館のような施設を運営していたのですが、人と情報が交流し、会議にはない成果、日常的なコミュニケーションや信頼関係が生まれました。空間は学校にあらうが、地域にあらうが同じことだと思うのです。子供にとっては世代を超えた出会いがありますし、何人かの方がおっしゃったとおり、子供の参画ができる、メンバーとして発言し、自己実現ができ、学校教育にはない伸び伸びとした体験ができ、偶発性や創造性があり、とても大事な場だと思います。

そして、そこにもコーディネートをする、場を運営する人、リードする人がいなければ、空間だけそこにあって、好きに座ってくださいというだけでは、何も起こらないと思います。

最終的に、先ほどの予算説明にもありましたけれども、静岡型のコミュニティ・スクールや学校支援地域本部事業が仕組みとして既にありますので、これをフル活用され、進んでいくと思います。コーディネーターが養成されていますので、日常的に地域がつながり、子供を守るセーフティーネットができると思います。

コミュニティ・スクールは片仮名ですけど、全く新しい発想ではなくて、かつて日本の学校はみんなそうだったのではないかと思うような懐かしい学校の姿を再現する、普遍的にあった学校という機能をもう一回みんな考えようということの一つだと思います。

最後に、教育委員会制度が変わりまして、学校と首長部局、つまり福祉やまちづくりや産業部局と密接につながることはプラスだと思い、そういうつながりが子供たちを守るネットワークの一つになればいいなと思います。

6歳までは福祉の部門が全ての子供を把握していますが、6歳以降は学校しか全ての子供に出会っていないのです。そうすると、学校が情報を開き、他の機関と連携する姿勢を本気で持たなければ、子供たちの未来は保障されないのではないかと思います。学校と地域との連携というのはとても大事な要素だと思って、今日の話をお聞かせいただきました。ありがとうございます。

矢野委員長： どうもありがとうございました。

それでは、お待たせしました。鈴木さん、お願いします。

鈴木委員： 私も磐田のスポーツ部活の視察に参加させていただいて、そこで実際に競技を行っている子たちと話してきました。やはりそこで一番感じたのは、部活をやっている子たちの目がとても生き生きとして、真剣に部活に取り組んでいるなということがとてもよくわかりました。

なぜそのような姿勢で取り組むことができるかと考えたときに、スポーツ部活に参加するという選択をして、その場に集まってきているということが重要なのだと感じました。やはり普通の部活だと、先ほど農業高校の中に、農業を実際にやりたい人と、やりたくないけれども農業高校に来てしまっている人がいるという話がありましたが、中学校の部活も同じで、本当に自分の力を高めたいという人もいれば、とりあえず部活に入らないといけない決まりがあるから部活に入る人もいるということがあって、その子たちは、目標というほどの強い気持ちを持たずに、部活に参加していると感じていました。

その子たちの何が問題かと考えたときに、自分がやりたいことを持っていないことに別に危機感を持っていない、危機感がないということが一つの問題ではないかと思います。なぜそのような状況になっているかという、やはりその後にとりあえず大学に入って、とりあえず企業に入ればいいという、高校に行って、大学に行って、その流れで、将来とりあえず何とかなるだろうと思って日々の生活をしている人が多いのではないかと思います。

先ほど、大学のことを知らない高校生が多いというお話がありましたが、実際、私も高校生のころは、自分で大学のことをちゃんと調べることに力を入れていませんでした。その中で、高校生がちゃんと大学のことを調べる機会が必要であると思うと同時に、高校では総合的な学習の時間という時間があるのですが、高校の教育に関する講演会みたいなのがあったときに、大学に入ってから「高校の総合的な学習の時間に何をやりましたか」と聞くと、何をやったかをほとんど覚えて

いない人が多いというアンケート結果というか、そういった体験があるということを知りまして、実際、私も高校のときに総合的な学習の時間に何をやったかは記憶にありませんでした。総合的な学習の時間に、自分で考えて、自分で課題を見つけて、自分で調べるといったことをもっとしっかりやるべきだと思いました。

それと同時に、先ほど竹原委員もおっしゃいましたが、県立高校と市町村、企業との連携には、やはり少し隔たりがあるのかなと思っていて、やはり高校から大学を選ぶときに、高校生に地域にもっと目を向けてもらうような取組を進めていく必要があると思いました。

最後にもう一つなのですけれども、先日、奈良女子大学附属小学校の学習研究発表会に参加して、アクティブ・ラーニング、今やっている小学校の教室のことについて聞いてきました。小学校1年生のクラスの教室を見たのですが、そこでは、1年生なのですけれども、先生はほとんど授業を指導する立場ではなく、もちろんサポートに入りますが、司会として授業の進行役となる1年生の子二人が、その授業の中で子供たちを指名して授業を進行していくという形で、とても立派だと思いました。

子供たちが自分たちで考え、自分たちで授業を進めていく上で一番重要なのは、授業と授業の間に子供がどう動くかが重要だという話をお聞きしました。やはり家庭の中では、1年生など子供たちが家庭の場で授業を深めるために行動しようと思ったときには、親の助けがとても大切で、助けがなければ動くことができないと聞いて、その小学校は、一般的に余裕がある小学校で、中学受験もあるところなので、親のサポートを受けることができるのですが、もしそれが一般的な小学校になると、やはり親のサポートを受けられないところがあるので、そういったところを地域でサポートできるような仕組みづくりが非常に重要だと、今回の皆さんの話を聞いて思いました。以上です。

矢野委員長： 大変貴重な御意見をありがとうございました。

加藤（暁）委員： 先ほど農業のことだけお話ししたので、私のフィールドの件で付け加えたいことがあるのですが、第1回目のこの会議で、留学生の受け入れの重要性についてお話ししたのですが、その後、公益財団法人AFS日本協会という、五十数カ国から世界中の高校生を500人ほど日本に連れてきて1年間ホームステイをし、それから、500人の日本人の高校生を五十数カ国に派遣して1年間ホームステイをするということをやっておりますが、その理事長を拝命しました。

それで、今すぐできるかどうかという問題はあるのですけれども、特に今、イギリスがEUから離脱したり、それからトランプが登場したり、かなり閉塞した状況になっていると思いますので、日本もこれから国際化という意味では、身近な国際化をしていかないと生き残って

いけないし、こういう閉塞している世の中だからこそ外に出ていたり、それから外の人を受け入れることが、これまで以上に大事な時代になってきたのではないかと思いますので、是非静岡県の県立高校で、例えば1校に一人ずつでも海外の高校生を受け入れていただければと思います。これは全くお金も要らないのです。1年間預かってくれるホストファミリーだけを探していただければいいのです。

単に英語がしゃべれる人だけではなくて、タイ人だとか、さっきのラオスの方だとか、いろいろな国の人たちが来ます。1週間とか2週間というのは限りがあって、なかなか子供たちもうまく理解することができないと思いますが、やはり学校に1年間いるというのがすごく大事なことだと思いますので、来年への課題ということで、もし機会があったら、そういう子たちがいることで、どういういい効果があらわれるかを一回発表させていただけたらと思います。よろしく願います。

矢野委員長： 是非願います。

皆様、大変すばらしい御意見、ありがとうございました。1年間の反省、そして、来年度へのヒントがたくさん提出されたと思います。その皆さんの御発言をこれから具体化して、来年度の目標を決めてまいりたいと思います。

少し時間が迫っておりますが、皆様、資料の37ページを見てください。

私、この実践委員会をやらせていただいておりますおかげで、学校や施設など、いろいろなものを見てまいりましたが、37ページの一番上に「施設で暮らすこどもの大学等修学支援事業」というのがございます。先日、掛川の児童養護施設を見てきましたが、18歳で援助を終えずに大学を卒業するまで援助すると。これは、静岡県独自の施策ではないかと思いますが、これは本当に意味のあるものでありまして、いいお金の使い方をしているなというのを、現場に行ったときに肌で感じました。県の予算も限られておりますので、私はできるだけ企業の協力を得て、お金だけではなくて人を出していただく、人材バンクの人材や指導者として動いていただくということも含めて、人と、できればお金の面での協力をいただいきたいと思いますが、県のほうも、こうした生きたお金の使い方をされていくと、いいと思います。特にこういう養護施設に入っている子供たちは、学校には行っていませんけれども、余り世の中の話題になっていないので、少し御紹介した次第です。

それでは、先ほど申し上げたようなことで、今年度を締めくくりにして、来年度を迎えたいと思います。

終わりに当たりまして、知事から一言願います。

川勝知事： ただただ御礼を申し上げます。ありがとうございました。



矢野委員長、また5回にわたり御出席いただきました委員の皆様方、ありがとうございました。清水先生、今日は磐田の活動について御紹介いただきまして、ありがとうございました。

なかなか政治家が「教育の世界にこうだ」ということは難しいところがありますけれども、富国有徳の国づくりを目的としております。これは富士山を四字熟語に置きかえたものなのです。そして、「富士」というのを「富国」、あるいは会社だと「富社」、個人でも「富者」です。徳がなければならぬ。徳がある人のことを士と言うでしょう。ですから、それは誰が決めたわけでもないのです。あの「フジ」という音に「不死」と当てたり、オンリーワンの「不二」と当てたり、「不尽」とか、いろいろな字が出てきたのですけれども、誰が決めたとかではなく、今の富を支えるのは立派な人間でなくてはならない、国も同じでなくてはならないということで、富国有徳と。この「ふじのくに」というのは、山梨県もそうおっしゃっていますが、静岡県は1980年代からの自称なのです。ですから、これを自覚的に使っていると。

ですから、立派な次元になる道は幾らでもあるということなのです。文・武・芸三道鼎立と言っていますけれども、知は高く持たなければいけないと、情けは深くなければならぬと、意は強くなければならぬと、そういう形で心を磨いて、意を鍛えなくてはならないと、こういうことでもあります。

そうした中で、文部科学省が自分のところの人材派遣会社みたいになっていて、レベルの低い組織になっていますが、あそこの事務次官から最高の人材だということで初めて採ったのが、ここにいる林君です。すばらしいですよ。こういう人もいますのですけれども、100億円をもらうために魂を売って、向こうの受け入れ大学になるという本当に恥ずかしいことが起こっております。

本当の地域の自立というのは、人の自立なのです。一番の根本、地方創生の自立は、地方にいる人間の自立なのです。この自立をどうしたらいいかという、自らのことをよく知らねばならないと。それは、実は相手のことも知らなくてはならないというわけですが、まず自らのことを知るための勉強、北は北海道から南は沖縄までの同じ学問は必要なのです。世界中共通です。

しかし、あわせて現場を知る必要があるのです。だから、一言で言うと、学問的に言えば、座学に対してフィールドワークです。経験なのです。現場教育という。先ほど片野君におっしゃっていただきました。酪農とか園芸とか、特に牛などは、毎日6時半にちゃんと検査しなくてはならないから、放っておけないです。田方農業高等学校では、高校3年生が高校1年生を教えているわけです。そのように、体で身に付けることというのは、確実に上がっていきます。

あるいは伊豆半島は、今年、恐らく世界のジオパークに認定されると

思いますけれども、高校生が小学生に伊豆半島について教えに行っています。こうした、子が子を教えるというものは、実は学校の指導要領に書いていないのです。全ての社会というのがフィールドになり得ると、こういう観点で私自身も自らフィールドワークをしているのだと。フィールドには、歴史もありますし、文化もありますし、地形もありますから、これをやらないといけないということです。地方創生の一環として、一番大事なものとして、この教育があると思っています。

ちなみに、ここにパンフレットがありますけれども、何と富士山が世界遺産になった途端にお茶が世界農業遺産になりまして、和食、先ほど言われたように439の食材がありますから、「食材が勝負の和食は静岡県のためにある」と、熊倉功夫先生が言われたぐらいです。

それから、先ほどの宮城先生、これは世界の演劇の都から来たということになって、毎年、まさに演劇と静岡が結び付くというのには驚いたぐらいでしたけれども、こうしたことがあったり、あるいは駿河湾が世界で最も美しい湾に認定されたりといったようなことが、望みもしないのに降ってくるわけですね。

今は平成29年2月ですから、平成25年6月からちょうど45カ月です。45カ月で46件ですよ。1カ月に1件、世界クラスの地域資源だとか世界クラスの静岡県に縁のある方が認定されているということです。先ほど加藤暁子さんが言われたように、こうした世界の中で、世界を相手にどういうふうに地域が自立していくか、それが目標です。吉里吉里国と違うのですよ。チャンバラしないのです。パスポートも要らない、言葉も一緒、通貨も一緒。しかし、ふじのくには、東京の中央政府から自立するという志を持っています。

ですから、この地域をテキストにして、いろいろな人が立派に育っていく地域にしたいと。そして、言ってみれば、アメリカンドリームにかわって、この国に来れば夢がかなうと。

私が学長を務めた文化芸術大学の今年の卒業生代表は、何と10歳のときに、出稼ぎで来た親に連れてこられた子でした。なぜそれを知ったかということ、彼女は答辞できちっと立派な日本語で話して、あるとき突然「母国語で言います」と言いまして、そしてぺらぺらと話したわけです。はらはらと涙を流すわけです。ですので、みんなびっくりしました。私もすぐそばにいたものですから。そして、また気を取り直して日本語で話して、答辞を学長に差し出して降壇したのですけれども、何を言ったかということ、「私は10歳で出稼ぎの子としてこちらに来た。お母さん、出稼ぎの子でもここまでできるの。お母さん、ありがとう。」というふうに言ったと。お母さんもきっと保護者席にいらしたのでしょう。お母さんも恐らく立派な答辞の日本語はわからないので、自分の言葉で言ったのですね。

それから昨日でしたか、ワタナカ君というカンボジアのトップのサッ

カーの選手が藤枝に入団しましたね。ここで学んで、そしてカンボジアに帰るということで、要するに、イスラムの人も、ありとあらゆる人をこちらに受け入れますと。

アメリカはそういう国だったわけです。今はそれとは違う国になりつつありますので、静岡は誰にとっても、訪れてよし、学んでよし、働いてよしと、こういう地域をつくっていくということなのです。

かつて福澤さんは、欧米、西洋の文明に追いつくためにはどうしたらいいかということで、「一国の独立の基礎は一身の独立にあり、一身の独立の基礎は学問にあり」と、「学問の基礎は実学だ」と言ったのです。それは今で言う洋学だったのです。これは陳腐化した偏差値論になっています。

ですから、もう一度、今憧れられている日本について、あるいは現場についてもっとよく知らないといけないと。これがフィールドワークです。こういう学問をどういうふうにしていったらいいかという、やはり地域ぐるみ、社会総かがりで行う以外にないのです。そういうことでございまして、今日は幾つかの提案もいただきました。これはまた来年度に生かしてまいりたいと思っております。

この1年間、どうも先生方、ありがとうございました。厚くお礼を申し上げます。

矢野委員長： それでは、これで会議を終わりたいと思います。

事務局： 皆様、長時間にわたりありがとうございました。

矢野委員長、どうもありがとうございました。

来年度の実践委員会につきましては、後日、事務局から連絡をさせていただきます。よろしく申し上げます。

それでは、以上をもちまして第5回地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会を終了いたします。皆様、ありがとうございました。